

批評モドキ vol.1

～戦争映画としての
エヴァンゲリオン新劇場版
「破」～

比良岡美紀
(2009年、2011年)

戦争映画としての新世紀エヴァンゲリオン新劇場版「破」 (1)

1945年8月15日、日本は無条件降伏をした。本土への空襲や白兵戦、そして二度の原爆投下を経ての決断であった。

2009年4月にチェコで行なった演説で、オバマ大統領は原爆投下の道義的責任に触れた。被爆国日本では核廃絶への希望が広がったいっぽう、原爆を投下したエノラ・ゲイの元乗組員は、戦争の早期終結には原爆が不可欠だったとして大統領発言を批判した。

アメリカに終結を急がせるほど、日本は戦争に文字どおり命を賭けていた。若者たちを特攻に送り出し、ただひたすら勝利を願った。しかし「天を回らす(めぐらす)」ことも叶わず、戦後日本をしょって立つべき彼らは海の藻屑と消えていった。

しかし中には、回天搭乗員を一人も出撃させず全員で「生きて」日本に帰る、それだけを考えて人間もいた。2009年6月公開の映画『真夏のオリオン』で描かれた倉本艦長がその人である。実在の人物をモデルとしたことで、戦争の理不尽さと戦後への希望が伝わってくる。戦争と戦後との間に時間の断絶はない。戦争が終わったその瞬間に「戦後」が始まるのである。

この映画の余韻が残ったまま、『エヴァンゲリオン新劇場版：破』を観た。これは戦争映画だと強く思った。「使徒」と戦うのが14歳の少年少女である点など、戦争を思わせる点はいくつかあるが、何より重要なのは、生き延びて「戦後」を迎えなければならない点であろう

。2011年3月11日の大震災を経験した現在、「戦後」は大きな意味を持つ。ひとつには震災とそれに続く原発事故が「第二の敗戦」と言われるためであるが、それだけではない。1945年の敗戦を経て日本が大きく変わったように、今また日本は大きく変わらなければならないのだ。

「使徒」とは何者であるのか、前作の『序』も含め、新劇場版のストーリーの中では明らかにされていない。とはいえ攻めてくるのだから迎撃しなければならない。そこで重要な役割を果たすのが、14歳の少年少女たちである。地球を守る組織、ネルフに選ばれたパイロットとしてエヴァンゲリオンに乗り込み、使徒をせん滅するのがその使命とされている。使徒の目的はネルフの地下に囚われた仲間を取り戻し、地球を滅ぼすことであるからだ。

前作『序』では、ネルフの頂点に立つ碇(いかり)司令と、その息子で不本意ながらもパイロットとなったシンジとの関係に重きが置かれていた。二人の関係は、父なる神と、神の子イエス・キリストとの関係を彷彿とさせる。イエス・キリストが磔にされる前、なぜなのかと父なる神に問いかけるが、同様にシンジも、なぜなのかと父に問いかける。しかしイエス・キリストの問いに父なる神が答えないように、碇司令もシンジの問いに答えることはない。

『破』では二人の関係が変化を見せる。碇司令は息子に対する自分の感情に戸惑い、うろたえ、度を失う。大いなる目的を達成しようとしている碇司令には、シンジの力がどうしても必要だ。その目的は父と息子という個人的な関係にとどまるものではなく、全人類の未来にかかわるものだ。父は使徒をせん滅したのち、息子を通して人類救済を成し遂げようとしている。それは父なる神が、子であるイエス・キリストを通して人間を救おうとしたことと符合する。

戦争映画としての新世紀エヴァンゲリオン新劇場版「破」(2)

人類救済という目的の前に、父子の確執など取るに足りないことだ。その証拠に『序』で碇司令は常に冷静沈着であった。それゆえ碇司令は神になろうとしている と思った。しかし『破』を観て考えが変わった。神は別にいるのだ。ならば神の意志を受けた者、つまり預言者も別にいるはずだ。それが、次回作『Q』に登場するカヲルではないだろうか。

テレビ版でカヲルはあとからパイロットに加わるが、カヲルが使徒であると知り、シンジは苦悩するという。おそらくその設定は『Q』に引き継がれるだろう。『破』ではアスカが乗ったエヴァンゲリオンが使徒に汚染されたという理由でせん滅された。次に戦う使徒がパイロットとしてやってくるとしても、特段の飛躍は感じられない。

もう一点、注目したいのは、エヴァンゲリオンの「兵器性」である。『序』でも暴走することはあったが、『破』ではアスカとの戦いに自動プログラムを導入したことで、人間の統制を離れた兵器がどうなるかを強く印象づけた。2009年のこの時点で「兵器性」が示唆されていたことはきわめて黙示的である。震災で制御不能となった「核」を我々は目の当たりにしたからだ。みずからに甚大な被害をもたらした「核」を日本はエネルギーとして制御している――原発の安全神話はそうした考えから生まれたのだろう。

しかしそれが崩壊した今、エヴァンゲリオンの物語を「核との戦い」に置き換えれば、我々は戦争のただ中にある。どうしたら戦いを終わらせられるのか、その解は誰も持っていない。しかし戦時でも、いや戦時だからこそ、戦後への展望が必要だ。エヴァンゲリオンの世界でこの展望を持ち戦後の青写真を描いているのは、シンジの父、碇司令だろう。

碇司令の大いなる目的が達成されれば人類は救済され、そのことが「戦後」をもたらすに違いない。しかしカヲルが預言者であるなら、彼にはどんな意志が託され、それは碇司令の大いなる目的とどう関わるのか。さらに『破』で登場した新キャラクター、マリはどのような役割を持つのだろうか。次回作『Q』において、これらの疑問に解が示されることを願わずにはいられない。

戦争が終われば、時代がくだるにつれ、戦時とは異なる意見が大勢を占めるようになる。エヴァンゲリオンの世界でも、実際に戦った者たちや戦争を目の当たりにした者たちと、そうでない者たちとの間に意識のずれが生じるだろう。それが「戦後」だ。

戦時と戦後に断絶を作らず、つながりを保つための鍵は何であろうか。当事者にとっては記憶して時折思い返し語ること、のちの世代にとっては過去を切り捨てず、記録して未来への教訓とすることである。そうして初めて「戦後」に希望が生まれる。エヴァンゲリオンの世界に「戦後」が訪れた時、果たしてどんな教訓が残り、どんな希望を人々は持つだろう。

『破』で見せた展開が『Q』でどう発展し、戦争映画としてどのような結末を迎えるのか、非常に興味深い。その展開と結末は、いまの我々が直面している戦いと密接なつながりを持つことになるはずだ。

批評モドキvol.1

<http://p.booklog.jp/book/24958>

著者 : miki-hiraoka

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/miki-hiraoka/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24958>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24958>